

静物の時代

三岸節子は、お気に入りの壺や花瓶など身近にあるモチーフを組み合わせ、洗練された造形感覚で多くの静物画を描きました。独自の画面構成で高い評価を受けた1950年代の作品や、渡欧を経て帰国した晩年、壺をモチーフに描いた大作など、静物画を中心に紹介します。

No.2《花・果実》1932年

20歳の《自画像》を出品した春陽会から、夫の好太郎が創立に参加した独立美術協会に移り、はじめて出品し入選した作品です。濃密な色彩や勢いのあるタッチには、当時、独立展でよく見られたフォーヴィズム風の表現を感じます。その後も独立展でたびたび入選を果たしますが女性は会員になることができず、1939年には新制作派協会に会員として移りました。

No.4《静物》1942年

戦時中の暗い世相の中でも、室内にあるテーブルや身近なものをモチーフに、画面上で豊かな世界を繰り広げました。この頃、画集で見たフランスの画家のボナールやマチスの作品に惹かれ、装飾的な画面構成や色づかいを研究しました。本作品では、奥の壁を濃い色で塗り、手前の格子柄のテーブルクロスを薄い色でややせり上がるような角度で描くことで画面の平面性を高め、果物やナイフをアクセントとして配置しています。テーブルの上に光が満ちあふれているような感覚を覚える静物画です。

No.9《花と魚》1952年

1950年頃になると戦前の華やかな色づかいから一転、白や褐色を基調として花瓶などのモチーフの形を際立たせた造形的な静物画を描くようになりました。新制作派協会展に出品した《静物(金魚)》が昭和25年度文部省買い上げ作品となり、この年の芸能選奨(現・芸術選奨)文部大臣賞を受賞しました。さらに国際的な展覧会にも招待出品するなど、この頃、高い評価を得ました。

No.11《鳥と琴を弾く埴輪》1957年

戦後、焼け野原となった日本では、各地で開発とともに発掘調査がなされました。新たな歴史を作り出す過程で土器や埴輪は注目を集め、岡本太郎などの美術家もその力強さや素朴な美に魅了されました。1年余りの初渡欧を経験して1955年に帰国した節子の目に、東京の博物館で見た埴輪はことさら新鮮なものとして映りました。埴輪を日本の美の原点と考え、自らコレクションし、その力強さを自分の作品に取り込みたいとの思いで埴輪の連作を手がけました。

No.16《太陽讃歌(山はくれない)》1969年

1964年、節子は軽井沢での独居生活を終え、神奈川県大磯の眺めのいい丘陵地に移り住みました。生活の変化は作品に新たな展開をもたらし、原色を多用した「太陽讃歌」の連作が生まれました。壺など身近な静物に加え、太陽らしきモチーフが新たに現れ、屋外の風景も作品に取り込まれました。

No.29《作品 I》1991年

20年以上にわたりヨーロッパ各地で風景画を描き、1989年、84歳の時に帰国しました。神奈川県大磯で豊かな自然に囲まれて、さらに意欲的に制作に取り組みました。1992年には若くして亡くなった夫・好太郎(1903~1934)と節子の2人展が開催され、節子は壺や瓶をモチーフとした連作3点〈作品 I ~ III〉を出品しました。本作品はその内の1点で、二つの壺が静かに語り合うような作品です。

静物の時代

会期：2024年11月30日(土)～2025年3月16日(日)



展示目録

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	自画像	1925(大正14)	20歳	30.5× 22.0	3F	油彩・キャンバス
2	花・果実	1932(昭和7)	27歳	90.0× 72.0	30F	油彩・キャンバス
3	室内	1939(昭和14)	34歳	80.0×130.0	60F	油彩・キャンバス
4	静物	1942(昭和17)	37歳	52.7× 45.0	10F	油彩・キャンバス
5	静物	1943(昭和18)	38歳	60.6× 72.7	20F	油彩・キャンバス
6	静物	1948(昭和23)	43歳	53.0× 73.0	20P	油彩・キャンバス
7	「女人短歌」創刊号表紙絵原画	1949(昭和24)	44歳	27.3× 19.0		油彩・紙
8	花	1951(昭和26)頃	46歳頃	52.8× 45.6	10F	油彩・キャンバス
9	花と魚	1952(昭和27)	47歳	65.1× 90.9	30P	油彩・キャンバス
10	かれい	1953(昭和28)	48歳	90.9× 60.0	30M	油彩・キャンバス
11	鳥と琴を弾く埴輪	1957(昭和32)	52歳	97.0×130.3	60F	油彩・キャンバス
12	静物	1958(昭和33)	53歳	65.0× 80.5	25F	油彩・キャンバス
13	花	1950年代後半		19.0× 78.0		陶板画
14	花	1950年代～60年代		53.0× 45.5	10F	油彩・キャンバス
15	とうもろこしと魚	1963(昭和38)	58歳	80.0×116.5	50P	油彩・キャンバス
16	太陽讃歌(山はくれない)	1969(昭和44)	64歳	90.0× 72.0	30F	油彩・キャンバス
17	ヴェネツィアの橋	1971(昭和46)	66歳	92.0× 73.0	30F	油彩・キャンバス
18	スペインの白い町	1972(昭和47)	67歳	72.5× 60.0	20F	油彩・キャンバス
19	大運河にて	1973(昭和48)	68歳	60.6× 73.0	20F	油彩・キャンバス
20	雲と海の対話(夕焼)	1975(昭和50)	70歳	65.1×100.0	40M	油彩・キャンバス
21	静物	1970年代		36.0× 20.5		ペン、パステル・紙
22	作品 I	1985(昭和60)	80歳	65.0×100.0	40M	油彩・キャンバス
23	花 ※寄託作品	1986(昭和61)	81歳	34.8× 26.8	5F	油彩・キャンバス
24	崖の上(アンダルシア)	1987(昭和62)	82歳	73.0× 92.0	30F	油彩・キャンバス
25	小さな町(アンダルシア)	1987(昭和62)	82歳	89.0×116.0	50F	油彩・キャンバス
26	作品 II	1988(昭和63)	83歳	72.6× 91.7	30F	油彩・キャンバス
27	ラコラオーラの城	1989(平成1)	84歳	96.5×130.2		油彩・キャンバス
28	花(ヴェロンにて)	1989(平成1)	84歳	60.0× 92.0	30M	油彩・キャンバス
29	作品 I	1991(平成3)	86歳	130.3× 97.0	60F	油彩・キャンバス
30	自筆原稿「絵画の美」 原稿用紙10枚					

三岸節子 装丁書籍

『つみくさ 現代フランス閨秀詩選』 石邨幹子、1943年(昭和18)、櫻井書店

『白い犬』 永井龍男、1951年(昭和26)、創元社

『傍観者』 井上靖、1951年(昭和26)、銀座出版社

『青春虚実』 高田保、1952年(昭和27)、創元社

『息子の青春』 林房雄、1952年(昭和27)、創元社

『母』 大岡昇平、1952年(昭和27)、文芸春秋新社

『雪間草』 今日出海、1952年(昭和27)、小説朝日社

『限りなき困惑』 畔柳二美、1955年(昭和30)、大日本雄弁会講談社

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録のNoは作品の並びと異なります。